

花の季節も夢の間に過ぎ春もいよいよ深みゆく候、皆様には益々御清栄の事と拝察いたします。

さて事務局より会員の皆様にご二三御連絡いたしますが何卒よろしく御願ひ申し上げます。

三十六年度最終配本について

会報第一号で御知らせいたしました配本予定は原稿の集りが一部遅延、所謂年度末印刷所の最も忙しい時期に持ち込まれたため、印刷製本共に大へんおくれましたが、漸く出来いたしましたのでお届けいたします。事情御察察の上御了承下さいますよう御願ひ申し上げます。

会員の継続について

皆様の絶大なる御支援の下に発足した此の事業は資金面、運営面等いく多の困難を伴う難事業ですがこれ等の障害をのり越えて益々発展させてゆき度いと存じます。就きましては全会員の皆様、三十七年度も是非継続会員として御支援、御協力の程御願ひ申し上げます。若し止むを得ない事情でお止めになりたい方は六月末日迄に事務局迄御連絡下さい。期限内に御連絡がない場合御継続と認めて御取扱いたしますので御了承下さい。

会費並に送料について

三十七年度の会費も、昨年と同様一口千円と決定いたしました。

本会は御承知のように会員制になつて居りますので、皆様の御払込み会費と一部県費補助金等により維持経営をいたして居ります関係上、会費は是非七月末日までに御納入いただき度いと存じます。次に送料ですが昨年夏郵便料金の改正により郵送の場合、一部が六十円位かかります。昨年度は全部無料で御送付申上げたのですがこれは会の運営に大きくひびく問題です。そこで本年度より郵送希望の方又は郵送によらなければならぬ方には、郵送料として一部五十円、年間二百円を御払込みいただくことに理事会で決定いたしました。尚十部以上まとまつて送る場合無料、十部以下では実費をいただくことになりました。実費の場合大体七冊位迄、九十円、八・九冊の場合百二十円となります。お含みの上どうぞよろしく御願ひ申し上げます。

会員の現況について

三十六年度会員は、一六七六でその内訳は小・中高校五三三、同職員三六二、計八九四、その他一般が六七二となつて居ります。三十七年度は是非二〇〇〇にしたいと念願して居りますので、各会員の方々にも同好の士におすすめて下さいますよう御願ひ申し上げます。



みやま文庫

会報

No. 2

37.4.1

一読後、子どもたちのほつともらす吐

息とその所感。

。家の近くでのけがのこと。わらびとりの人がまむしにかまれた話……、そして、自分たちのまわりには種々の出来事があり、それらが人間の温かい心づかいで解決されている事実。私たちはこうした中で育っている。と結ぶ子どもたち。

身辺を見る目

石田金太郎 (岩神小校長)

たまたま担任のA先生がやすまれたので、六年生への出張業。もちろん居らぬより居るがましと言つた気遣いまで。

題材は「血溜りのリレー」といって、北海道の辺地、とある鉱山の精練所に発生したガスえそをめぐる人間愛のリレーである。ガスえそはたぐいまれな病氣であつたのか、血清の時感もきわめて少なく、ようやくに探してあつたのが札幌の病院、こうした苦心も輸送を頼む最後の切札、終列車に間に合わぬこととなり、刻々に生命をけずられつつある病人への救いがたいもどかしさ。しかし人間の善意は帰京直前の新聞社の飛行機を飛ばし、さらに幾多の機関と人々の誠意に、ついに生命を保ち得た物語である。

読書経験を通しての人間性の陶冶、生活への開眼。私は授業にもならぬ出張業の中に、愉快のほとばしりをあたくかく感じていた。

身辺を見る目。忙しさにかまけて、己を見つめる事を怠りがちな自身への反省。

このことを郷土認識に転移して考える。郷土の風物、生活事象。怠惰な日々を送る私には、ともしれば意味のうすいことではしかなかったが、この程手にした「みやま文庫」の教冊が、限りない愛着と新鮮味をもつて、郷土認識をせまってくる。自然の中に生きぬいた人間のちえの尊さ。現実生きることの意味づけなど。

身辺を見る目。郷土を知るよすが。私は子どもたちの声に聞き入りながら、感懐あらたに、この文庫への愛着を深めた。

書評

○よい郷土出版を郷土人へのスローガンで、群馬県知事神田坤六氏が会長となり、群馬大学の学芸部長相葉伸氏が編集委員長となつて、去る六月誕生した「みやま文庫」は、年間会費、千円、三、四冊の単行本を会員に頒けることになつているが、事務局を前橋市米町県立図書館におき、このほど、第一輯「赤城」を発売配布、つづいて「上州と利根川」(上)「上野村民俗調査誌」(上・下)、「上州と利根川」(下)を刊行した。第一輯「赤城」は富岡市出身の福沢一郎画伯が装幀に当り、口絵は磯部卓丘画伯、写真も多数入つて、B6判、総ページ数三二九頁。巻頭には、志賀直哉氏を渋谷常盤松に訪ねての座談会「焚火のころ」が特集されている。

語る人は志賀氏、妻子夫人、聞く人は、相葉伸氏(仏教史研究家、文壇)と市川為雄氏、記録は楠沼良介氏、写真は横田正知氏。志賀氏は大正四年五月から九月まで赤城にいたが、当時、新婚早々だつた。「焚火」「赤城にて或る日」など志賀氏を中心に、当時の思い出が語られているが、赤城だけでなく、内村鑑三の思い出などにもふれ、文化的な面でも興味津々たる読物となつている。

利根川と文学のつながりはどうなのだろう。利根川を舞台にした作品はないのだろうか。その様な点も出来得るならばとり上げて欲しい。

37年度刊行予定

みやま文庫も会員皆様の御支援により第二年目を迎えることになりました。

新年度の刊行予定については諸方面よりいろいろな御教示がりましたが、これらを参考、協議の結果次のよう決まりました。

- 1、へき地のちから(写真集) 6月刊行予定
- 2、榛名 8月
- 3、県政を語る(知事等の閑談) 11月
- 4、この百年のこの巨人 2月刊行予定

郷土人叢伝

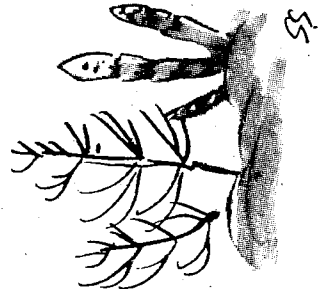
なお、文庫の企画、刊行テーマ等について御意見等ありましたら、どしどし編集部あてお寄せ願います。

「榛名」(37年度第2回配本予定)

執筆者決まる

この度開かれた編集委員会で「榛名」の執筆者が次のよ

なお、未発表の写真も多数けいさいされ、故柳宗悦氏、英人ジャーナリストのスコット、猪谷六合雄氏なども登場、志賀氏夫妻の大沼湖畔での記念撮影もあり、文献としても貴重なものであろう。他に十四氏が自然科学・文学・民俗・観光各方面を分担執筆している。



うに決定しました。(文庫第1巻の「赤城」が大変好評であつたので、「榛名」もこれに劣らぬような力作を)との声が強く寄せられている折柄、いづれも専門の権威である諸先生方に執筆をお願いした所、快諾を頂き、予想外に早く刊行できるか、と思つております。

表紙装訂は、郷土出身の画壇の泰斗、山口薫画伯にお願ひできる事となり、「赤城」同様立派な力作が頂戴出来上るものと期待しております。

「榛名」目次予定

- 榛名を想う 土屋 文明(歌人)
- 榛名の歴史(中世) 尾崎喜左雄(群大教授)
- 近世の歴史 木屋 隆安(時事通信支局長)
- 山岳信仰 今井善一郎(県文化財専門員)
- 民俗資料 池田 秀夫(博物館学芸員)
- 山麓の人々 本多 夏彦(郷土史研究家)
- 伊香保温泉史 佐々木 一郎(伊香保中教諭)
- 神 楽 佐藤 幸平(榛名神社神官)
- 幸 若 舞 有川美徳男(群大助教授)
- 公魚など 門倉 幾太郎(湖畔亭主人)
- 折原りんご 岸 衛(渋川北中教諭)
- 榛名路の文学 神保 治人(渋女高教諭)
- 榛名の自然 木崎 喜雄(群大教授)
- 〃 五味 礼夫(群大助教授)

会員だより

上州山女魚釣り奇聞

佐藤直
(俳人)

「オオイ」「オオイ」とかすかに呼びよる気がして、自転車のペダルを休める。日影道と称されるこの街道に日はとつぷりと暮れて月も無く、切り立つた山の切り通しなれば五月の夜風もここばかりは沈澱して闇の深さをいつそう強めるかと思はれる。

後を振り向いて闇を透かせば、チラリチラリと自転車のライト、これが声の主らしく、一心に自転車を揉んで来る。

ここは利根川と吾妻川の合流地点より吾妻川をさかのぼること三里、榛名湖を水源とする沼尾川の下流近く、時は昭和十四年五月某日。この日山女魚の喰いの良さにつられ、手もとの暗くなるまで釣りくらし、意外の大漁に氣をよくしての帰路の奇怪なる経験であり、今にしてみればなつかしき、よき時代の思い出であります。

さて自転車を止めて、魚籠の中に、ベシヤと跳ねる山女魚の水音を聞き乍ら、待つ間もなく、一人の男が自転車の

荷台に木箱をつけて、呼吸せきまつて横に寝るようた高つてくる。「ああ助かつた、お願いです、一箱に橋を渡らせて下さい」と云う。

男の全身をはしる恐怖が夜眼にもあらはれて、真剣な声が続りついてくる、こちらは若さも若し、大漁の氣負いもあり、急に英雄になつた心地、理由も聞かず、男を従へて一気に闇の橋を乗り切る。風道の橋とは名ばかりの高さ百尺はあるかと思はれるボロ橋、加うるに星もなき大闇夜、渡り切つてもしばしは無言。やがて金島村の灯がチラチラと見え出す頃になつて、やつと人心地になつた男は、ペダルをややゆるめつつ。

「助かりました、有難うございました」と云う。これが魚の行商屋さん。自転車の後部に先程見た箱は商品の魚を入れる木箱であるという。

「そうなんです、あの橋です、売れ残りの魚が無くなつていんです」

去年の丁度今頃奥吾妻への魚の行商の帰り、頭の重くなりそうな水蒸気の充満した五月の夜、やはり自転車でこの橋にかかろうとした時でした、橋の真中に満月位の大きさの赤い火の玉が、そうでした、周囲を照らすでもなく、只それだけの明るさで「ボーン」と光っているではありませんか、それはあたかも私を待つてでも居るかの様に——。自転車からすべり下りてハンドルにすかつたままればは

行く事も帰る事も出来ぬありさま。

隙小僧はガクガク、全身の血が足先にさがり、思はずその場へ倒れんとするところへ、夢我夢中のフルスピードで橋に乗り入れた時は、唯良だけがペダルを踏み飛ばして、眼の中一ばいの火の玉に突つ込んだという。と、その一瞬、忽然と光りが消えて、橋上唯漆黒の闇ばかり、消えし後のおそろしさは、更に倍加して背筋を襲う、二十米にも足らざる橋の如何に長く思はれし事が、漸く対岸につき、ややほつとした心地にて、怖いものを見たさの首を、怖くお後へめぐらせば、こはいかに、火の玉は再びあらはれて、こたびは、川岸の老松の上でありしという。

一心不乱の自転車で我が家えまろび帰りし時、魚籠の中はきれいに空つぽでありしと云う。「助かりました、今夜もあなたに会はなければ、きつと又去年の火の玉にあつた事でしょう」

「今夜も丁度塩鮭が一尾箱に残つて居りますので」

座談「つり談義」に語り落した体験である。

「利根と上州」を読んで

S・日(前橋市・事務員)

赤城・榛名・妙義と共に我々群馬真人にとつて忘れることの出来ない詩情畫が利根川も、活字になると、どうも

非情になじみやすくなるかと思うと悲しい。

勿論、利根川を科学的に分析することは重要なことであり、必要不可欠なことでもある。しかしきさか内容が高度にすぎないだろうか。専門用語の使用、それに文章を助ける為の図表等が、かえつて理解を妨げているようにも思える。専門用語には簡単な注釈を加えてみたらどうか。その点「水質からみた利根」の項は読者に対して親切である。

「水質からみた利根」「利根水系の地質」は高校卒の知識でも十分理解出来た。

この文庫の読者の水準がどの程度であるか判らないが、多くの人が郷土を知るためにも、一応高卒程度の知識で理解出来る内容が適切ではないだろうか。

特に数字や科学方面に弱いとされている女性にとつては、図表類、専門用語、数字を見ただけで読む意欲は半減するのではないか。

学問から離れて大分経つた現在でも「利根水系の地質」「水質からみた利根」は興味深く、「水源紀行」は、心の奥にひそむ冒険心を呼びさまし、水源探究を誘惑する。

歴史編は、自然編に比してとりつきやすい。特に、伝説となるとはのはのとしたなつかしさを感ずるし、他の用水の歴史や橋等についても親しみを覚えるのは、そこに人間社会が存在したからであるうか。